

コメント 1：商兆琦『鉍毒問題と明治知識人』（東京大学出版会、2020年9月）

片岡龍（東北大）

(1) 内容紹介

序章 本書の視点

第一章 田中正造の虚像と実像

第二章 田中正造の思想世界——特に儒学との関連について

第三章 「情」と「智」の相剋——勝海舟と福沢諭吉

第四章 「社会」と「国家」のはざままで——島田三郎と陸羯南

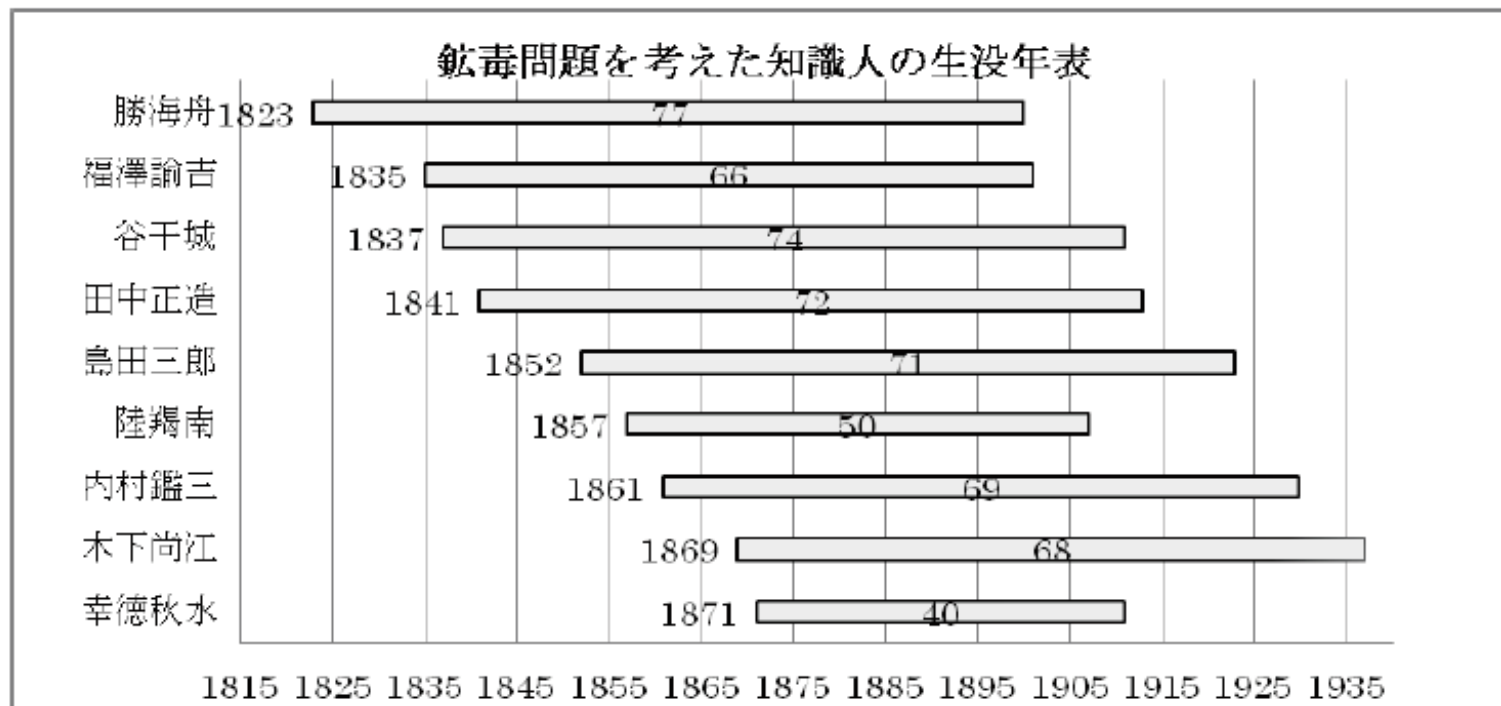
第五章 「近代」への反逆——内村鑑三と幸徳秋水

終章 「近代」の問題と明治知識人

～「天保の老人」

～「中間世代」 ※2013論文では、陸は「明治の青年」

～「明治の青年」



(商兆琦「足尾鉍毒事件をめぐる明治知識人」『環日本海研究年報』20、2013.3より)

序章 本書の視点

一 問題の所在

- ・従来の足尾鉍毒事件の研究は、田中正造という「個体」を中心に「全体」を提示。しかし、「個体」に読み込まれた価値観が「全体」に投影。

二 課題と構想

- ・課題①～ 田中正造論（鉍毒論）の相対化。 ②～ 明治知識人たちのさまざまな鉍毒論の知的背景の分析。
- ・目的： 明治知識人たちが、どのように「近代」を受けとめ、どのように「近代」に内在する欠陥を克服しようとしたか？
- ・検討対象： 足尾鉍毒事件という「出来事」ではなく、それをめぐる「見解」とその「思考様式」。

三 なぜ「近代」か

- ・①ポストモダン論の空論化。 ②世界の多くの国々では「近代」はなお重要課題。 ③近代化の展開過程に孕まれた多様性への目配り。

四 本書の概要

第一章 田中正造の虚像と実像

- ・虚像～ 現代の諸問題を見抜く「予言者」。 → 実像～ 利益より精神を重んじる「精神家」、やってみから考える「行動家」。

第二章 田中正造の思想世界——特に儒学との関連について

- ・「正造の思想の源泉は、宋学を中心とする幕末の儒学である」（終章、246頁）

第三章 「情」と「智」の相剋——勝海舟と福沢諭吉

- ・「情」K～ 儒教的思惟（「道德」・「人情」） VS. 「智」F～ 近代的思惟（「政治」・「法律」）

第四章 「社会」と「国家」のはざままで——島田三郎と陸羯南

- ・儒教的思惟と近代的思惟を調整して融合（「道德」「人情」の喪失を「社会」「国家」の視点から回復）。

第五章 「近代」への反逆——内村鑑三と幸徳秋水

- ・儒教的思惟と近代的思惟の対立を「近代」をめぐる新たな思考（「キリストへの信仰」「社会主義の確立」）に統一して発展。

終章 「近代」の問題と明治知識人

(2) コメント

・本論文の分析枠組みは、**<儒学／近代>**である。そこから「天保の老人」世代では**<儒学>**と**<近代>**は相剋し、「中間世代」では調整して融合され、「明治の青年」世代では統一して発展されるという、明治思想史の一断面が描き出される。

この枠組みの中で、田中正造の思想的源泉は「宋学を中心とする幕末の儒学」とされる。しかし、田中正造の「個別」研究としてはそのような「解釈」も可能だが、同時に本論文での**<儒学>**は、足尾鉍毒問題の「全体」を分析するための作業仮説的概念である。

この場合、「宋学を中心とする幕末の儒学」を**<儒学>**とすることは妥当か？ 言い換えれば、**<儒学>**は、**<近代>**と対置して足尾鉍毒問題の「全体」を捉えるための仮説概念になり得るか？

評者は、16世紀後半から19世紀はじめの「朱子学」「陽明学」「古学」「心学」「実学」「考証学」等を、「<朱子学>遷移の諸相」と一括して論じている（片岡龍『16世紀後半から19世紀はじめの朝鮮・日本・琉球における<朱子学>遷移の諸相』春風社、2020）。評者の立場では、「宋学を中心とする幕末の儒学」は、**<儒学>**ではなく、**<儒学（朱子学）の遷移>**の一相となる。

たとえば、田中正造が1911（明治44）年5月14日の日記に書き記した「人ハ万物中ニ生育せるものなり。人類のみとおもふハ過りなり。況んや我独りとおもふハ過りの大へなるものなり。…人ハ万事の靈でなくてもよろし。万物の奴隷でもよし、万物の奉公人でもよし。小使いでよし。人ハ万事万物の中ニ居るものにて、人の尊きハ万事万物ニ反きそこなはず、元気正しく孤立せざるにあり。これ今日の考なり。」（『田中正造全集』第12巻、187-189頁）という語を、**<儒学>**と捉えるべきか、**<儒学（朱子学）の遷移>**と捉えるべきか、如何。

・近年の足尾鉍毒事件の研究に関しては、田中正造研究だけでない多面的領域からのアプローチの必要性が説かれている。そうした領域の一つとして、鉍毒事件に対して「自然科学者」（医学、農学、鉍山学、地（質）学、生物学、環境領域…）の果たした役割がある（山本悠三『足尾鉍毒事件と農学者の群像』随想舎、2019 ※）。

※同書は古在由直（1864-1934）だけでなく、沢野淳（農商務省農事試験場の初代場長）、坂野初次郎（農事試験場技師）、長岡宗好（当時東京帝国大学助教授。古在の同僚）、横井時敬（1860-1927）、津田仙（1837-1908）らの農学者を取り上げ、総括的な把握をめざす。

本論文では、「明治知識人」の中に「自然科学者」は含めないが、**<儒学／近代>**という分析枠組みをさらに練り上げていくに当たって、「自然科学者」や「実学者」なども視野に入れてみる必要はないか？

また、足尾鉍毒問題が明治だけの問題でないとすれば（←「あとがき」研究動機？）、たとえば水俣病問題における「不知火海総合学術調査団」（「近代化論再検討研究会」メンバー中心）の知識人（色川大吉、鶴見和子、最首悟、原田正純…）の反省（→聞き書き）との比較なども。